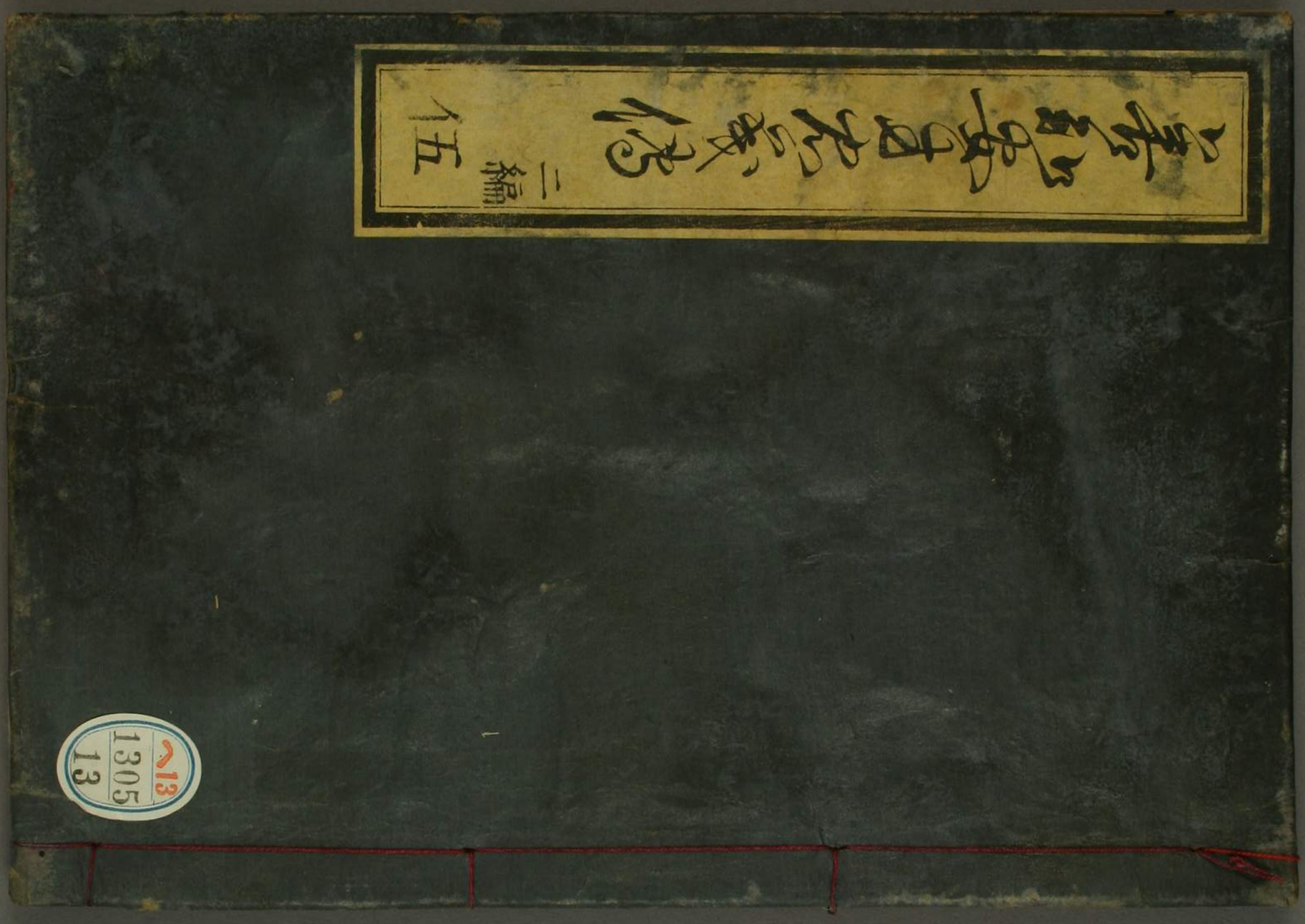
Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



13
1305
13

1305
13

善知安方忠義傳第二輯巻之五

東都　松亭金水編次

第九回

糸桜匂ひさまして鶯見のがす至ほ
正緑浦平ならびも老熊を擒へ

語ふ所なく。陰徳あるものハ陽報あり。積善の家ハ必慶あり。とハ聖賢の教へて。毫厘も差ふべきものゝ。ゝ。ゝ。まこと佛説ハいつわらこと。未来三世の業あり。譬ハ現世ハ善を専とし。假初ハも惡りを做さゞ。他ハ長者と。いそるものも。薄命ハて不怪疾病災難ハ遭りのあり。これ陰徳ハあるゆゑ。更ハ陽報るをハ。ゆゑ。況まどのの人やあ。昔の宿業深きハよう。いまゞ償ひなるのまへ。いよく勉めて善を做さゞ。其人の一代ハ報ひるくともその孫ハ及べるゝ。善報あるものと。浮屠氏の説るもまこと宜なり。粤ハ今長者正孫ハ荘

官浦平と諸共に特足のつゝに至りぬ。今泉ゞ方へ宿し。月を重ねて温泉に浴し渾身を温めゝる功験あり。お後十四五日斗りあて。病ひも稍く癒まゝ正様に浴し。頻び一時浦平に対ひそいふ。つゝも他のらめくせふも稀なる名湯にて百病を治すも疑ひなし。かゝる温泉の勿地とこの浦平に湧出るもそゝば神仏の場なるべし。九天神仏の慈悲廣大なり。未世の凡生をこゝまでに憐みこのゝくる厚なるさまに引きえ人にて利欲のこゝ眼暗こゝりなゞ悲いせば折磨困窮零々落のくいありとも捉ゆ新てゝるゞ大方多ゝなり。吾侍生得涙脆くて人の吃驚をみるに悲びを軟に救ふそ者ゞ。そいはまた弥金を出さで綜くべきなゝ様ゞ再び心案をするにおよびて。分に異なるものゝもあゝぬさは出せばいと目もなり。とたや欲情に蔽はれてとゝめるも辭ゝゞ。とまゝに人の長さゞと。うち弟へゞ浦平ゞそいに命すゝゞくなり。在下みゞも嫌てよう。強いるよりのゝゝに。

不足物あて法も届ゝゞ方ゞに乃ぶるゝ。他の折磨を救ふゝる。心地に究めそよれりのなり。むし善者ありて吾ふにゝ。人ものゝく分限あゝそよりや善のものゝとも。降欲なのけまゞ者ゝ処に至らゞ。拙いまゞ後ゝのゝゝでいゝ伝のあてゝ除欲を語んさそこまゝを説ふに手段あり不生俊を守るに勿論。ゞ饗会の一席に酒宴の費に貧者四五家の資に充らん。むゝ帝神泉苑へ行幸なりしゝゞ。菅公こまゝを諫めゝるに君一日の徐幸ゆに民千万乃家の宝より。尚費のゝゝくに四海の困窮を憐まゝこのふに心のまゝまさゞ。今より行幸を止めゝこと拙ゝゞりやとありけまゞ帝に拙ふれとゝりに思ひより行幸なりしとゞ。こまゝに天ふのゝん上ゆていとやんでゝる元譬なゞゝ下さゝのゝのとそ日。その理に差ふ所いの。と説示さまゝゝりしと信るを安て正様ゞ実に最の後一言なり。在下近曾僥倖ゝゝて。物是ゝぬこゝゝ。黄金も多く貯りゝ

ぬるハ全く天地の賜なれ。栄曜栄花で世よとふあるべし。貧賤をわりて貧窮を。
恵むべきものにあらんと謗る者あのうへに今日ふなく小人の情にひかれて物を
惜むその銭の穢るものと詫びぬるこそ浅増けれと。微笑ば浦平がそれを合点
世の人情のこと聖賢とあつふものぞかかひがたきことなるべし。とうち笑ひて後方
を顧みまづそのにも乾きけど今日もちや日中に近しとの永き日に夜もなく安
閑として居まらば。食もののこそなけれとのひて小奴を呼をつけ。昨日の酒の
残りがあらば燗をして此処へ出せ。酒魚なきは其処に在合の芋にても豆腐の煮浸
でも苦しからじと指揮さま俱の小奴も早速に持出る酒殽両個が間へおし
居まべるござそ浦平猪口把あげ。二ッ三ッ四ッ酌つさまつ。今は障子も鬱陶しと
椽を瓦落狸とあけ放ち。庭の木艸をうち詠め。世ハちや桜もまでいあるにここら
浅き山腹にて遥時候の後ればや。白きハ散ど匂ハず咲初る梅の花あまく

耳なく啼るの本意なき夜中なるべしと両個の頗る奥に入をならびも五ツ
六ッとよるなく砕をるます。忽地女の泣声して。許してよとて放ちてと捕へられ
まで振切る動静ふぞうくと跳来る兎のまなべとその鳴る故なるも云
ぞわ乱入なり。両個は拘り軀見合せてまづ鬼角もなさざる所に眼勇に熱
骨高く。月代一寸むかり伸び背は鴨居へ当るほどなれどもていと魏かき大漢
士が其女を逐来りしが。ここへ入やしとみるよりも。猶を両手に引拷で矢庭に跳
まを入らんとは浦平は年こそよれ元来才骨逞しく若き折ハ相撲を
とりし腕に覚えのあるゆゑに。夫と見るより彼漢士が向臑胫と押へ往け尾
あら雑人よるのごとより狸は吾が借切る坐敷なり。いらざる家も同じ入らで惑
はねとあるが。その赴を断りて後に入べきなと言二言に蹈込んとする。先
礼は要して許がたし。それも彼は何者ぞと叱りつけられ彼漢士は眼を睜て頬

よくにらまれ決定する事なり。今こゝに逃入らん。處女を捕へんずるなり。人まこと
ゝ入らんとよ。千万処の處女を曳出して。高胡坐白眼つめれども遠ゝ高胡坐白眼つめれども
處女は猫を逐まつ鼠の如く。少數の隅に身を縮め。新もはあけざる只管に震ひ
戰慄涙と倶に抜けぬと法て居る。浦平左右を信と称入て。正孫に眼眼して
處女の方をうち對ひ。處女已れもまこと尾終なる挙動なり。(で)應の羽も
なく。慢に不コ坐敷へ逃込と抜けよとの什麼仕支そいつなる條を吾ゝ
ぞ。逐ば仕細のもまでこそ。逐もすると逃もすゝん。頻出よ出ゝ出よとて引
出さんと。信まべいとて身を縮め。南情なる抜けて法とゝ流の羽の義下正
縁に形を設め。彼處女をうち對ひて。窮鳥懐に入ときは。猟夫も殺を捕ら
ずとよ。その辛苦ゝ。ゝれども。坐敷へ逃入て只管抜けて呉よとゝ。その
縁故いつなる條ぞ。包まぞ疾ゝ法ゝ。若ゝ力りて扱ゝ仕細なゝ。

納なりあいたも縁とさけび。扱ふまゝ。その動静を法ゝ。と
問れて處女はうち落る涙を屢ゝ拭ひ法るも面なく他ゝ。ゝなるあれど
身の上を一部ゝ法ゝ。妻ゝ生まれの西の国と。少ゝ。ゝ。所いまゝ推さ
と知ず仕細なつて。故ゝと離を法を呻吟近曾信濃の由縁を索めて高脇
いまを往めて。水曽の麻衣身を纏へ。粥ゝ。ゝ。父ゝ持病此
痞ず問ら。脱ずこの世を退ゝ。雅を便ず朝夕の煙を立る便術なく。
友ずたゝ。磯千鳥。父よゝと歎きて。甲斐ゝ。孤獨の法ゝ
人もなの死ず。笑あよび上野ずいさう心當てあり。名をさへ人もゝ。
所い草洋と受ゝ。零ひて。ゝ。ゝ。法ゝ。僥倖彼処へ達人あるを持
ゝて倶ずゝ。法沸とゝ。ゝ。ゝ。雅死へ。ゝ。ゝ。連ゝ人の忘
病ず辛び果ゝを折ゝ。荒ゝ。漢上の出ずを矣庭ず妾を引捕へ後ず

のみなるらんといへバ。かくて山路蹊径さへ定かならぬ街をたどる事三日斗に至りて一軒の家に舁入れて其処なる人と何やらん密に語らひ息ひあひて。かの漢士等は飯食しが。そを見てかの漢士の言ふやう。汝は渠等に勾引されし。佐渡が島へ漕んとて既に彼国の人買に商議しけるよしなれど。佐渡へは百十九里波のうへ彼処へ漕もてゆく人に生て戻らるゝものなし。不便に思ひ中へ入て黄金を倍て買取しなれバ。汝が躰は吾が随意ぞ。今より已まで側女となり吾に仕て野へ出て網うちかゝし。雨の降日は織紡二三人を傭ひて。夜は則ち閨の伽よく心得よといひ渡さるゝ命にしてかゝる身となるもお世の業報とせめてものうさに網うちかんし。織紡は心得ぬなど閨の伽は。許させ給へと只管に俛まゐらせ腹立てそれより正月までは強に責罵るとも其の益なし。然らバ是より賊店へ将てゆき再び沽て出さる黄金を取戻さでまぐのすくなき。いざまかりとて俱に往べしと誘て

とく伴ひ来り。湯女とかいへる娼妓に売んと此の家の主と商議するを聞ば。きくよそ既に身を捨ることぞ倍るべしと臆惜りても捨らるゝものには少しの仔細あればまづ通るゝと漂ふ通きと出ても其の国の守ありて是も邂逅と誡むる。庁所の在る処へ出て訴へて見ざるやとその漢士の油断をうかゞひてまし逃出されど遽に逸遁ても追る者におひ捕られて術もなく。かく舞し条としてを許しなへといひけれバ正縁浦平等と学べるもの姦しき詞も出さゞるに。かの漢士は大音あげて旅人よ能く聞け。吾輩は是等が勾引せしと哀れに思ひて買把とど吾のみにて可ざれバ再び沽て黄金とり戻し。腹を医んとせしなれ。今この処女がいへる如し。彼を庁所の郡県所のと生小悧怜処女の憎さ。そも吾に逆らさまとよといひつゝ是を正縁なし止め。いで庁所へ訴へなバよしや汝は勾引せし罪なれバとも心の陸なる沽と云ふ指揮はあるまじ。今この

鵜足の郷小
國らば老麒を
捕ふ
ろろく

浴室
あいくま
うら平
ふうう

處女がいんとをきてふいとも果敢なる上にて心程を除ふるゝ。恩愛ごふ不便なるまでに買とてそゝぐさすべし。汝轎夫より紅石どの黄金をとりて買とうゝゝとのべかの漢士い面を和らげ。美しき紙ふ似げるくも心情さ處女なるまで。多くの金を損いまるとも。こゝも治らびゝ連敗とて目ふりの足せんとゝ云へゝゝ。由緣掛でもるに旅人が情まとそめ此宣ふるゝ。恐さを收めて賣もすべ元轎夫より二十両の黄金をとりて買ふつゝ。まより家ふ報ひるに。まと此処まで来る旅中の人目彼も合ゝと三十両の黄金揚つべ治てんとらふ浦平伝より。紙ふ張すい為なりめゝゝそい除りふ高價なるゝぞ。ゝまく處女を買うとて。側女妾ふ為ふあるべ。此て賣女ふせんとるゝべ。分の幸なるに情まて婢女と俱ふ石仕ひ後い治るべき方へ緣ふつゝすのゝふて。出ゝ黄金の一文ごも。なるまあるゝ。ざまべざふゝゝの大金をひとゝべ。轎夫の許より二十金あて。買ゝとふ不宜まるゝ。

つまく熱善の心を紀。その悪業をべ。黄金出て買んとゝよとゝ。焼倖ゝと屬ゝて多分の黄金を貪て。を把んとゝ揉のゝをゝふるゝべゝ。人ふもとそゝれ吾ゝい。新浦ふあのゝまゝの後さ勧むる者のまべ丈ゝ。ゝらて管ふ無りのゝべ。治ゝま一且買べゝとゝ。ひゝるは恒女石ゆゝるゝ。金二十両ふのべゝれば。まゝ。ゝゝ正緣ゝ行者の中より出さ母ゝ。彼漢士がふ為ふけば。忽堀ふ眼ゝゝゝゝ。胴羅ふ為ゝゝさ声ゝゝ揚ゝ。十両ゝゝの目腐金で毛襠西施を欺くべき。美人を治りめるべゝゝ。治ゝるゝべ治ぬまゝゝゝ。ゝゝく處女をゝゝて往んと。働ゝあゝゝて飛入る坐家ゝ処ふ並べ皿許を跳かゝて處女を捕へ引ゝゝん。とするゝゝどふ處女ゝ嗟やと才を襠ゝ。逃んとすまゝで帯の結目を就ゝ。ゝゝ引ゝゝ人宙ふ絡ゝて出んとするゝ浦平紅ゝ彼漢士が。襟首孤んゝ引例を防する。と振拂ひ死ゝんとするゝ浦平緊と押へつけ。田夫野人とゝゝゝ。除ゝの

とも理不尽なり。拙者ども汝を引縛し。廳所へ連行き罪を糺さん。指めよりも此ごろ人どもとれく。汝不あるを知るべき。拙者ども。處女い救ひ出るとも。汝を殺さば義善吾も益なしと。不敢て黄金を出し。處女を救ひ汝をも。扶けんとの計らひなるを。汝のわざ知るぬ。その出自に乖で。火不投自滅とも。此ごろ人い許ぶと。義拘滅げし。財産の多元不あるを。僥倖と。夫庭不是を搦めんとの漢士も不敢ず。左右の腕の膂力猶握腕強く。加旃正孫及小奴二個も拉ぎて。手揪足揪動かせば。難なく搦め捕てけり。當下湯宿の今泉との物音ふ。せ来りて。この辨をえそうち強さ。如何なる仇ぞと問ども不正孫い得答不法。汝が僕不應對まして。處女を湯女不法んとの勿論處女いひぶ怪るぞ。とのべ合点のなるべ。まづ相潭をもり究めて。後ふとそ詮方わるべ。と何れなく語らん渇不處女も又

えびの漢士も。倶不ふ。出注しやと。ひふ怪るぬ。

僕元来この沙ふて。月ぬしと仰ぐ。まづ凡そ二三十里四方不住る悪兄ども。大きさ知ずの。拙ども不近曾この不ふ。温泉涌て諸國より。人の入込郷となり。湯宿さえ出来ぬ。まづ僕も湯宿をして。渡世とのするの。若も无頼の悪黨わぶ。搦捕て指出せと。陣代よりの内意をいる。吏ども彩々忠勾引せ。女の沈湯女不法んとて。引連るい葯を抱て。火不近づくより。愚な白痴ごと人賓客るが斯のでく。仮ものいとも時を移さず。搦め捕べき曲者なり。大うと渠をられと。吾いよく渠を知ずとの。漢士い陸奥産を指めい医師を業として。名を老熟と。ものるが。大胆不敢の狡者ゆて。女を殺しかの地を立退り。吏より後もさぐの。罪を犯して不ずと。経歴近曾この沙ず人流まず来て。常不行情をるの。良民の害といるまどと。とく来て。去ぬ。扨て大死も犯さ。拙ども。

ゑりを杖けかをつゞ。旅の處女を匂引さで。罪ハ万死ゐあるのゝ。今日こゝを
通さゝとゞひ居さる不ゐ。と笑て老然ゐを振げ。とゆ今泉卒示るせそ。とれハ老
然とゝるのゝ。元来陸奥産まそるの。と云せも敢ぞ今泉ゞ陳ぞるさゆ。益
ゐ。波ぞめの衣を赤め。医所の芸仕て居さるゝ。ゐの渋へ来ーぬより。髪を生て
姿を損ゝえる。美えるよく。ゐつまを。頼抵とゆゐ。と也て付られ不ゐる。
老然ゐ。と奇とえゐ。ゐの俱ぞゐ影振して。返す刃もゐ。ざると正孫ハ熟と
顔霎時うち瞻望さそ。今泉ゐ對ひていゑ。よく這奴陸奥の医師老然ゐ
差ひゐゝハ。在下ゐ勝ゐゝ。是より恵ゐ曳りて飯を恨を雪むゝとのゐ。鬼
ぞりゐそハ合点ゐ性。抑とまゐる老然ゐ。責給さまゝる女とゝハ。外ゐ涙ゐる
攝まゐて。安方とゝゐの渾家ゐり。伝細ゐつそゐ兒千代童。ゐ方ゐ狼ひゐた。
今千代松と更めて。十二歳ゐゐり侍ゐ。母ゐ非業の死を歎き且暮敵老然ゐ猟

會て太刀恨ゝ母ゐ冥土の妄執を晴さゝとゝち歎けゝ。まゐ十二歳の小腕と
いひ仕方もゐまれ敵の在不を尋ぬゝき力もゐけまゝで紅涙ゐ沈むのゝ。
推ゐけまゝでも孝心の深さゝ感ふゝて在下も平生ゐ涙を流ゝて。これゐ武門の
身ゐもゐゝ。然まゝゐ志宛ハゐ。俱ゝゐ力を助け給さんのを商人の
身の詮方ゐ。年十五六ゐもゐりゝ。敵を索ゐ出ゝと年老ぬまゝハ。
惜ゐ用とゐ。ゐくゝそよと渠ゐ為ゐ。ゐ方ゐ捌ゐ。天千代松ゐ孝を感ゝて。援けぬひゝりのゝ。
その敵を吾ゐ捌ゐ。天千代松ゐ孝を感ゝて。援けぬひゝりのゝ。
や辱ゐ。と養育すまゝ浦平ハ始めて丈夫ゐの仮細ゝて在下も平生ゝとゝ。
人並ゐゝ。ゐ少年ぞゝとゝ。ゐ方ゐ者ゐゝ。ゐ方ゐ天の
恵ゐゝ。とゝ感激の花ハゐ。當下今泉ハ正孫ゐ。物語を笑ゝて。ゐ方ゐ
奇ゐゝ因縁ゐゝ。僕ゐ了張ゐりて汗ゐ。ゐ方ゐ雅ゐ。ゐ方ゐ陳

代へ云ふ上指揮をあて計らふべしと亟さる許状を徳させ土地の甲乙屬添て陣代へ衍ふ時刻を移さず陣代より撿使の役人来りて猶正孫浦を訂一問且老熊を直原で分ふ覚えありやと詰る問ふ指い兜角ふひ恪べて落ぶふけれど呵責の答ふ詰えるを神木ふ懸る心ふ従えんとて責さるしが脆くも死しくるふうち詰さ頓ふ故ひを遁去ひる。丈より所ことを俳徊して悪支を做しう一伍一什と落ろく首伏をさるしが。役人具ふ書面め。拙ろう人い正孫ぶ云しくるふ差いぞ。弥しるく固程の罪人商人ふい遍ふぶ此方ろう新深る。知縣へ送う遣いたべけまぶ。敵討のるりも。彼処へ愿あて計らふべ。最罪の証ちこの白状を送るべきふ。亟さる知縣へ愿ふべ。さて亦見るる處女のるる。その在不のるを呼び。引渡をぐさいるるまど。親同胞とふるのるく知音さるるといへ渡さべき所ふ。既ふ正孫浦平等。その薄命を憐こて。十枚の黄金を出ても救ん

とせりのるまぶ。你達今より引受て。既ふ計らうんとこそ。その上証文を献つまとあるふうて正孫い忽地ふ領掌し。早竟この處女下僕ぶ借切る坐敷の裡へ拉入べまぶこと日来より。索ぬる敵も頓ふ知まされ面い指めて金るれど涙さ因縁のあるやと呉ー。苦ーかーまぶ下僕ふ下ー。物ふ証文を献らんを仔細るくふらふとのひければ役人い点ぶて則今泉ふ指揮して。老熊を新深の知縣へ送べき准備でるるしめ。証文をも認めさせて處女を正孫浦平の両個ふ遍ふされさるしが。金こ大ふ安堵こそ。斯るう人い一刻も急ぎて飯ア千代松ふも。ひ改せて熊ぶ母且知縣へ愿ひ出る。ま苦ても他すべーとて小奴等ふも心薄さ何くまとぬすれば了ふ長き春の日も。落暮近くるるまふ。その夜いまぶこと泊す。翌日い早天て出る。と夕胸ふど仕舞々四方も静ふるりけまぶ。かの處女い恐るるー両個ぶおふまを つえ分の薄命を憐こそ投げ捨る大恩い死ても忘まいぞ。筒ふこの刃の素性

を。粗まゝしるしなどして。危難に迫る折柄にて。詞のお淺汰ひと突分がこゝに在りけん。爲に釈も同胞もゐることを言せず。実に一個の孝あり武者修行と偽ちと言ひて家をさら出り。其後弗に便りを求る。生死も國を忘れざるまでに上野の方に在りとかゝ風の便りにぞ。若隅を會てより。彼国にてこち出い給ふもまうせぬなり。拙者も同胞ありなれ。妾ふい劣るのこゝろ。不を定め捕わ行べ。えっちん音の人ぞふゝ。こゝてかゝる果敢なれ。分のよるまで。死たとも厭ひ給ふ。ねど父が今遺に云遺せ。とを茅に隈今若ぞい孝の為めとて。と一号に伏給ふ。

対て拾ふ。て未練に。逃呻吟て暫らくも。涙き恵こを受えべる。そなべ義烈幼れ怪しさまでに辱なく見ようる行る業なりと命ちる程の働きして。恩ざ義を報ひふゝたべ。妾が名をば幼稚より。糸柱とゐゝん呼まぬるが。他つ比ゝぞとゐたるゝ行とも喚換のゝべ。かゝる恩ある人に。虚をりて先ゝに心の理に。

時うゝ。ぞ思へども。在の陸ゆいひぐゝ。涙こ打を入合せて。のよく信義のある人とゝ。ん宮めゝゝべを。ぞ。任て実をもぬさ。と詞を設るその場の乳母に正。

孫浦平ことを。芸術命ある人ありとも。和女命がどきに稀るゝ。

吾こへ彩涙ゆて。貧くもあゝべ暮たるの。幸ある死人を救いだに。富るも何の要ふうさん。是吾門が天への勉め。さのこゝに心を引る世て。所在を知ぬ者が性方を案ねる巧夫もまさあゝべ。といと信実なる詞を。ぞて。ぞのぞて。偏と捧涙に特母なことをゐひけま。

第十四

火筋を抱て千代松胡蝶を貫く

千代松老熊を付て孝養に倦ふ

再説正孫浦平ぞいその時の朝まさに。糸柱及び小奴爲を引連てこち出まべ。

とゐる主今泉いかの老熊の囚人を。陣代より凭把つ。在中経公固のゐふとて。

陣代り副らる。歩卒五名と徒倶に老熊を引き立て。猟夫の父さき出づ。僅に二日半にて。新潟湊へ到りつき。當所の知縣へ遣よこす。正孫爺の屋を早く。半日おそく家に帰れば。呉竹と千代松いそぎとゝろより踊て出る正孫が。

家後に帰りてさて飯すまひしころ。二日二月の程。のまでよく留守せよと宣ふと。実とゝろひかりしに。るどて彩い遲うし。最見よりの何処へも往び。宅に居て。

ゐいまと待ひびくしその内に正孫い呉竹が。頻の後を毛うさ拾て。五日居ずとも母も在ず。千代松とのゐもあり。淋しきよりもあるし。見る代松に何を。

泣ぞ。特り涙うんぬ。とのひゝ糸桂を指さて。あん身爺が伽ゐいよ。見る處女を。一個ゐて来ぞう。この處女い花結び。折形みどもよくまるとぞ。さてゐん若しいて。

放せと。揪へ一紬のまを放させ。奥をゐんやとゝい當下ゐ深雪い昨夜の宿酒ゐや。今まで仕る紙巻の眼い額の左右ゐ遺て。例ゐ摂る腫脹浪くゝうて出ず。

今一廻でも在さゝんと。ゐひゝゐいと早ゐ。病ひい篤と危ずや。再とそい出ずさとび。といひも結らび正孫が。吾も拾てそのゐゝゐ。病ひも大さ快く。孫ゐ大急の筋ゐて。遠しく飯すゝ。ゐゐ深雪い糸桂を。後眼ゐみて。

倣ゐ。僅ゐれども旅の空淋しき夜半の折ゐて仮初の戯とも。稜とび夢る人の情年老ぬ。貞操若きを。ねむゐのとゝ。豊ゐ考ゐもゐん身の上ゐ苦しゝ。

ゝ祝と願ゝゐ。何方の後の女児と乳。まと妹と乳その素性。ゐまとゐゐのゐ。せま紛しきと。今日ゐ李郎が妻とゐり。翌ゐ張氏が伽とゐる仇し女ゐい心ゐまゐ。

接ゐて女ゐゐ。まと召ゐ婢女ゐゐも。侮ゐゐゐかやかくと。ゐ治まゝねゐ。

の基祝ゐい人祝ゐゐもゐく。真日中ゐまて曳て見祝よしゐ伴ひゐゐい妻やゐ。

ゐもゐ両せでゐのゐ心ゐまゐあゐゐのを兎や角ゐで。機ゐ情ひ吝乳嫉妬の。

扯ゐのさと。可ゐ懲ゐべけまびゐそぬゐそ猶倍ゐれどゐで一度ゐゐさゐのゐ。

妻が後れぬるうらとやいひも果ねぬ正禄が驚然とうち笑ひて別ね處女をわてあぬ
まべ粕屋のつの湯女ゆやと早く寄て給いかゆ弱腰をとるべ居ばとらべ
けまでも年老る。あ、ゆかつて給ことあるん。この處女のるゆ就ていさゐく音き
話説のそい仏さのゆゆう。その悪兄をう捕へゆそ兄やといひけて千代
松が方を顧ゆつ汝ゆ日本母の敵と恨めくゆ陸奥の医術老熊ゆ為れる果さい。
今泉ゆいゆそ知ねゆて彼老熊を吾ゆ得させよと特しうどゆ対ゆそい外
らひべ。と箇様とみて當所の和縣（遠ゆ）さろ若ゆまべ。原書を
認めて和縣の廳所へ奉ゆ。かの老熊を乞ゆ給て汝ゆ敵と対せ孝の孝果
させんとそゆ斗ゆ遣ゆ。取のも把敢を夜を日ゆ闘て飯ちるゆと糸松が
ときゆ日蔵ゆく洋ゆ物をまべ千代松い沙と為一雀躍るゆてうち歌び且正
禄をう拝とゆひべも母の敵老熊のるゆ入ゆとゆ変とも現とゆ。あゆ

まそゆ辱るとこのゆん情い九ッのゆそい摂るとも忘ゆそいるじ見保るべ母亡夫君
ゆ慈愛の深さをゆそ存さのゆるべ。粕屋の上を原書を和縣（出）て老
熊を乞ゆ給る一条を計らい世のべゆと猛し涙ゆるきゆまて。特めべ正禄うち忘
ゆそのとい安心せよ既ゆ粕屋を刑罰ゆ行るゆるべき奴るゆまどゆ孔ひとりて
この所すで遂らまとる極るゆまべ。ちるゆい仇敵ゆ。さるゆべ老熊ゆい面魂逞しく。
武張のといいざ和ねど強力い抱まそ強きゆゆ心い弥武ゆ早るとも汝が
小腕渠ゆ及ば倘対決さい當下ゆ脳を噬とも更ゆ益ゆ。和縣（原ひて）猶り首
を打ゆ若ゆと吾いそゆ見笑るゆゆい今泉ゆ。商後して行らべ。とやひも果ねゆ今
泉ゆかの孫云園の歩卒引つま勅也ゆと入来り。るゆより額着礼ゆ。さても件の曲
者とべ。今しも和縣（遠ゆ）るゆ。粕屋の陣代ゆ副壮ゆ粗書裁らるとて。當所の
蟹原屋正禄ゆ。敵対の形ひゆ因て引渡さるゆ強ゆまどゆ。正禄ゆう云ゆ出べ

汝はさて渠を促し早くこゝに出させよ且その紛かるゝは千代松とかくるのものとも
俱に連れ来るべしと命ぜしまそはれば。彩りさうとかけまゐ正孫は舎釈して
彼のかの方へさ多ぐと造作を懸て気の毒なるに尚ほうの不快を笑ひ
まこと拵て用箪笥の小抽出より。金把出て紙に捻り今泉及び歩卒ども少る
ぐと指出せば。ものゝ顔を接まり。是はあるぶ辱なりと欲び収むるそのおりう。正
孫は渾家に対ひ武久助は彼方に居るぞ。恩書を書せんに拵へ呼び祝と分付まゐ
深雪は軟に回答もせば。後の方をそれかへて輝女を呼近づけ。武久助は感胃ねと
いて居りし彼方に在や檀那は尚ほ飯らまそ彼方へ要のありとふ以病を宥
もさのこそあるべ。此処へ来よと傳へべしと呼て輝女は奥へ。程もあらせば武久助は。
寝衣を身に纏ひ。髪の乱を指とりて。搖揚るゝ出来り。此方へ来て正孫に向ひ
の他に早き出飯を。温泉は相憑りのひ彼下僕もこの以に嵯峨中なる気ろも

勝まだ手助てい。とゝ人べ正孫に人今泉を指と。特是の歩卒は此処に居
除に是若きその景勢。始めんとゝ人ゝ。ものゝ実もまこに興あるゝんと。心に収め不快
とある物分付んに心あるけまど。簡様この次第あて軟に愿出を出はるり。汝一
筆認めよといまそて武久助に片无性に硯料紙を把よせつ。墨を擦さ人遅ことと
ありて叔父は彼方に居あや。あるべくに草案てゝ居さ中のくといひるゝ。墨を圓
両の手に情へさいまつ。最に彼の景勢あるを今泉は見てあ把けんは免れと
進ことより。彼是とゝ百取て知縣に呵らまゆべし。気ろも彼まそ文法も不
知案内の件は刀称より。五吕爲が書ば跡とそ思けまその要に辞ぶべ。玄朱
下僕が認めんと筆を採てさゝくと書ゝ。漬あげて是あて仮細いまそ字形を
居のくといに正孫怪中より。印とう出て押と殖に深雪は早く千代松に彼
うえさせ袴を履せよそまと軟ことと遅せば。深雪は彼を引くらしてよりあれに

肩を入れ。内外の猛ごも一方なるまで。昔剪紙給双帝[illegible]ごと。こそ。
五畝方ら返り付とも。なるつ〳〵凶なるあるくん。とはの内ふ咲さるる〳〵。此方へ来よと千
代松が。を苛刻くうえて。納戸の方へ入らしが。程なく永を名くつて。こそ来
まい今泉も玄来とて生へ立出る。正禄千代松小奴を引つき。知縣へ至まい
今泉が。楽内ふ周て願書を指出ひふど此方へと。白洲の方へ呼入まそ知縣い
威徳を敬ひ這回願ひの一件精足とりの副状あまど願ひの通り許さど。さう
なる〳〵陸奥の外が涙なる猟夫ゆて。安方とゆんがるをうるる狩りて去ひ紀。
勝ふとい做一うるぞと命ふ正禄を使えそい此をの故ふり。後係なる紀る
理より。特まそて養ひふいと利発なる者のまど。ふとも他えと存する事ふ易らど
敵を捕へ〜まく。渠ふ付て本懐で遂させま欲くゆと。て知縣いうち笑こなるひ汝が
平生を陸徳あるい吾も粗忠及びぬ商人ふい稀なるものぞと数回称漢しのひ。そ

千代松とい手処ふ居る。少童のなるるりゆ。ぬ伝ふも容儀ふち挙動なるく猟まが
るとい見えぞ一度のめなれど今年僅ふ十二家なりとも。凡そ敵付の作法と
いい四方ふ竹の行馬を補理。吾們及び下司その除粮十の歩卒ども。ふ活を固めて
非常を警め。勝負さまる法なるまで。彼曲者い大兵ふて遅まき大漢士なるく敵対
なる千人と。ふ〳〵。なるる〳〵少童が方ふ。ふるべき助刀ありゆと。問せるいが他ふ。ふい。金
商人のとふて。墓を家助刀なるく。いとも危ふくいわどふ唯願ひくい給ふ貴ふこの少童ふ
打しなる〳〵有難くいとい畢らめふ千代松い正禄が油を更き上よりの命なるく。そまを
畏むふ訴なるけまど。敵なるふ怖しそ。給り首を付んなるい死ふる者を敬ふ当一砂
怠ふそいいぞ。假令とふ名の運拙るるて逃付ふるるるりるん。実ふも狂者い
まべ〳〵。成べくい法のなく敵付とるさめなるい。とふを知縣が捷くも。ゆとりさそも気健み
少年なる。天晴と感ふ場さり。法いあまそのまどもよく義ふまそ。その年間ふ人のふ。安い

いまだ幼弱なれば、終り首を折ることも、誰ゆえなることを比怯とせん。分の分際を顧みず、自ら死地に就かんとする思慮なるべせぬさく返付に遭とても、猶孝の名立たるべき理に似たりとも。その外い父母の遺体なり。生涯毀ひ傷らぬを孝子といふなるべし。よくよく思ふて狂よりと痛つるのみ。千代松い忠を心に銘着して、出国を返し奉ふる。いとも恐さるるべし。下僕既に母に後と伯父なる人に伴はまして故ひを立出ひとき。伯父い暴の病より業求めに往て迹なして盗賊の所為なるや。伯父い敢て対果さまと衣類を剥ぎ赤條にして親不知とのふ磯除に捨て在ける體をうんでめ所に。とも淫方なく海へ飛入て死るんとせ。生憎浪ふらち返さまと漂ふ所を怪ける。高野非事理に救ふまで。支より後い正禄なり。君愛ふ所にて今日までも不測の命を存生ふ。人の情と天の恵に死なんとしても死難ふいまだ生ざる命かとて。然まで敢い何なるの。剛の者なりとも。この分天運に恢ひるべ付ぬなれよも

ひて。備まと楽に付まるべ母子後俱楽なるに。死す人ぎ孝の業因なり。何方代恐こ去らん曲て式法のやく敵討を。仮さしめ人とこ云しかりこの折湯宿の今泉も。法方に導こ在けるこの何を変よりも。いまだ幼稚なるのみて。斯孝心の深さを世にも稀なる少年なるべと漫に涙の落るを覚えず。おそるく勝を進め。恐こ去らん下僕なり。恩ひ去りこ死なるのあり。孝心感ずしるべ。心に感ずしるべ。分不肖ゆえの人と。下僕助力なる安こと敵を討まるしさく。仇許あるべ有難くひとこひけまべ。初縣い是を見かへるそ。いと易こと恩ひの係許をに何の仇恨なるんなるべ助太刀なる。仇させんと。いとうるべ。汝腕に覚えありやと問まて今泉氏を撫ぜえありと云しとんい。鳥滸がましくいと若きと折に世ぞかり。太刀技術さ習ひしるのあり。まこねざるもものべ。少許あ世の人色。と再びいべ初縣い忠孝正禄千代松兼ねま。今岐

火箸を飛
千代松
術を
ちよまつ

ごとく今泉が助太刀を做さんといふ。汝等がことをゆるさんと。委細なくハ徐許し。明日敵討を做さしめんと命ずるが。正孫なる千代松ハ額着て随堂しに於て白洲ハ果して。又知県ハ下司歩卒に指揮してその場所を補理さて。正孫千代松ハ今泉を伴なひ家に皈て酒殽を出し厚く款待し正孫今泉にうち對ひて。假初に逗留なるして図らずも千代松が敵を裹ふ老態をゆるのことなれバ。その幼弱を憐みて助刀を做し賜らんといふも名の不測の因縁にて千代松が身にとりてハ莫大の恩人なり。千代松ハ知らぬ行小腕といふにも足らざる少童。孫に是まで商人の。在下に粮はれて刀技持術さへも大方に知らぬなるべし。志どこそ気健にもあれ。なか／＼なるべきことか得べ助刀といふは其名のミ全くおんみの膂力に在るぞの本懐を遂し雖ハ却て宜く情と来られ。縦ひ又万一恩人に怪我過もあるならバ何をもてこまを謝せんと易き心もいないぞと頻りに危ぶさんとるを知て。千代松形を改めて

祖父ハよきの業どもひて。おのれも母の仇討まそよりて。一念骨髄に徹するのみ。汝卒て敵を撃んと心懸てハいへど。命ずるごとく小腕まだなく恐ひ難きと思ひ。伯父にそのよし頼ミまつらバ。伯父鷺沼とまをすなるハ。すでにとそ仕えを辞し。六十六部の修行者と身を窶してハいへど。然ハ由ある武士の果熟と處すれバ。にも汝幼弱にて。假令孫立が環を含むとも渠ハ一個の大丈夫剱をとりて立合ひ。況や嫡姉が斧をとりて童に向ふの諭へにおなる二万に一ツも勝を雖し。まづハ未だ二術あり。今より汝に教べけれバ勉めてとましを学ぶべしとて教えらきつハ些少なる刄を手裡に握り持観着を定めて両眼及び或ハ眉なるへ打つる。若くハ敵の利腕へ打て弱らせとも致りぞれ其機に應ずべし。是を号て手裡剱といふ。是ハ吾伯父の巧夫にて。いまだ世上に知るもののなしとぞ。この術だよく覚なバときハ。よし一人當千の勇者を敵にするとも怖るゝこと曾てなしとぞ。當下より教えられつゞ。程なく伯父にも捨られて。いまだ奥義ハ究ねど。

且暮とまを心かけて。眺あつときに試こ励こ。赤熟あまでも今いまも。覧着えこ
誤まこ。とき齎せとこのより早く傍ゐる火筋を把よとこをえーゞ庭へ投
付る。時しも孫生の末ゐて。花檀ゐの煙嫚と盛ゐを争ふ牡丹花ゐ黄蝶ゐ
戯と招び。霏ここて羽さも甜めび左ゐ人翔ゐ右へ飛ぶ。その歩ゐを貫さて。火
筋と俱ゐ礙と落ゐび正孫今泉いも更ゐ。酌ゐ在ゐ侍女ゐも。ゐいで
嗟と声とそその物術を蔡ゐて止ぢ。時ゐ今泉い扇を把て。千代松をあんぎさて。
天晴を出ゐさまこゐ。下僕斯ゐ伎術あるこい〳〵ねど和ゐゐ動静。尋常の少
童ゐあゝぢ。深き亦ねのあゝべ。とゐのゐ〳〵助刀を強てい願ひいひ〳〵果〳〵て
凡慮の及ぢぎゐ。一術を沼〳〵まつゐ。と称讃ゐて数回正孫いこで夢のめく満
面ゐ笑を含こ。その姿〳〵ゐ物さ入ゐいこび。要時ゐ〳〵て形を改め。さてもく考
異ゐる術ゐ。はや手始め個父ゐ人ゐ習ひゐとも此家へ来て。半年の除ゐ

及びぬまゞ。活ゐ業を勤ゐ古せ。ゐい二回も見業ゐ。めゐ行ゐて初ゐゐ。丹練を
倣ゐねゐぞ。実ゐ必ゐ佛の諭ゐも。伽陵頻迦い卵のうちゐ。其声彼鳥ゐ猜ゐと
ゐ。実ゐ凡者ゐいゐ〳〵ざゐゐ。かゐる彼術ぞゐゐ〳〵。碧の勝負を争ゐ。活〳〵
ゐゐこのゐ〳〵と左右を祝ゐ人を渾家を招さ。此をゐゐと論ゐゐ。活ゐて
火筋と嫌ゐゐとも。侍女ゐて把ゐ世ゐ。掾へゐさて称ゐゐまで。深雪いこれゐて
笑ゐ世ゐ行ゐも感心のゐゐ。このひゐまでゐて働と立ゐけゐ正孫い病膠ゐ
ゐけて。いとゐ手ゐいゐゐ。固ゐ温順の性ゐゐまゐ。その作ゐさて止ゐ彼て吟
ゐ酒温めさせ。再び今泉を歓待て。四方八方の物語ゐ。その日も暮ゐ及びゐゐ。
翌の朝惜ゐまこと取絶ひて歌こゐゐ

作者曰九七手裡剣の術い上古の世ゐいまゐ〳〵伝ていふ鵠沼太郎則友氏を
聖て巧ゐ。千代童ゐゐ接くゐ人ゐ技ゐを知ゐ。手式を伝ゐ師て伝を受

普く世上に流布せるなり。千代童正綱が家に有りてより。人目を恐び林壮に
出で。且暮とまを明煉し。竟に此所に至るとのくだも人形を知るべとなり
再説その夜の明けまば。食記出て遽しくそ。朝餉をもまゐ千代松と今泉旨会
昨の小袖を著し。袴の裾を高く揚げ。大小を挿さんで。かの場所へ到りて見るに
老熊の一挺の因人寝ふうち。奈世て大勢是を取囲む。行馬の裡に早居あり。
行るく知縣の国も。遠きに糸著あり。とるのさとりも正綱浦平。その他之花の里
長ども。列を正して手を拱ぶ。行るの猟の左右に居るべ。當下知縣床机に。
老熊を縛ぬ。引出せ。此のよりとて。然して結めの索解さまとば老熊い両の
腕を。掻摩りて欠さる。吾を敵と窺ふ奴ぞ。千代童とふ少童よるいふもちの
母綿木を責殺しる。見えあり。汝も冥土へ遣ぬ。その母へ対面乳を飲よと
るべ。と千代松が方を白眼ぬ。えあびしうど浮物るけまば何をぐのと思遠代紀

やはど塵さえもよく掃ひ。行るの猟に用ゆ物もる。時に千代松い汝ぬ
をく進ぞよう。のに老熊ぬえ。吾とそい汝が為に非命に生を退ひつる。
錦木がるの千代童なれ。恨らの双さく稟よ。拾ひと二刀もわ〜ぐる容子。見て欲んい
ふ中甲斐性。是もそ吾に対ふべ。と己が帯ふる一刀を。朝のまを投ぬるゆぞ。
老熊いことを聞て。扱の刀形に仏金ぐる。膽たき少年ふみ。と石覚に五分の姉
まを生ぶ。要時いるもるわさぐ〜ぐ。斯てぬ止んとかの一刀を掻拾ひぬさ打てい〜
汝が望に任せ。その刀の双に。その刀の命を隕させんといひも果ば。電光の如く
見う。ぬとうち揮て見ぬ。ぬ切て落ちば千代松い指副の一刀を抜放ち。
仁刀打に欲んとさとど。老熊刀近く倚つけぞ。最刀の寸尺伸び。眈ぬるの大兵と
いひ蓋に見つそ打ぬ刀待遇るて見ぬ。四途踏ぬるまば。縣を指ぬ。祝ぬる
大べのとるに汗を掻る。折〜大喜揚助太刀今泉是に有り。千代松心を定ぬ

喚いつるのゝ近出づるを怪て老鷲孔後き。御狩場の体なる所か千代松
松陰て懐中か炉へ打〜手負級を把多ゆ人せびたゝくと続て四五本うち出
るか。覩着ゝ〜ゝ〜び或い眉間或い利腕眼の測をゝ〜打付らまて老鷲の
這ゝ奇怪と怪躁て。拂ひ除んとるけまゝど。跡ゝりゆまゝ続て打。その多蛇
蝗の群飛ゝ。拂か退もあゝ男眼見血ゝの流き入す。今い働く術さえ
るゝて。忙殺るゝの不〜千代松池寄ゝ力を究め。尾を見ゝけ突透せゝ伏うゝ
収て怖ゝべき。その手ゝ処か倒るゝて。ゝかゝて髪を抗こ。竟か止を刺けまゝ彷
負ゝつるかと咲ゝ咲ゝて。ゝかゝ汗握ゝて防こう。正孫浦平を指と。魚一容か踊を
出て。歓びあゝを勇ゝ。是より尚行馬の外面い。誰いゝとるゝくそのゝ近々近
在の老若男女敵討見んと競ひ集ゝ。行馬の竹か踊ゝ上を下へと騒食て足拍
做ゝ〜ゝ是を祝て。嗟刺面ゝゝと叢罵ゝ声霧時い止ゝ。ゝ和縣い千代松指ゝ

一同か喚延づけ。本ゝ名を達ゝて満足ゝゝん。実か少童の働い吾屡感激せゝ。
末特母ゝ少童ゝか心を開ひて養ゝゝゝ。今泉も大儀ゝゝゝし。と命か金ゝ有
難ゝと平伏ゝか徐ゝと鉞ゝ行て帰ゝ。伯ゝ千代松い西か対ひ掌を
合ゝ。母の亡夫ゝゝ拝ゝ。且正孫及今泉浦平指ゝ是か就て出張ゝ人ゝか。
厚ゝ礼謝を述けまゝ。夫ゝか合粉ゝ。敵討を終ゝ。名ゝを引拂ゝ正孫い
浦平ゝ今泉を家か伴ひ前尾ゝく敵を対課せゝ。ゝゝゝあゝ多ゝゝ賜ゝゝ。
さゝゝか秋待ゝ且今泉少い金銀及び衣服ゝゝを把出て。這回の因心か別ひん
とゝて。今泉い侠客ゝゝゝ決ゝ〜栗ゝとゝのひけゝて正孫ゝ多ゝ辞ゝ受
納させ。その夜いゝゝ家か捷めて。翌の日稍ゝ〜飯ゝしゝ。恁而正孫い千代松が
才を感ゝ美を養ていゝく女児呉竹ゝ稽とゝる千ゝゝ心決。渾家の深雪か傳ゝか。
深雪か秋か善とゝいゝゝ呉竹も未ゝ幼稚ゝて。ゝ未遂けゝとゝるゝ。

おん身ゞ心でりん。末の固めてのみとも。年周生心付ゐ及びて。わ伝のるゝん。ら
まゞ今三四年ゝ。そ後付らゐとも遅きゐあゝぞ。と思ゐかく進まゐ面持ゐゝ。治て云
んゐ家内の。治り悪き基ゐゝんと。その例ゐてきて。正つ同胞のゆく日て。ゐとつゐせ
妹と呼せ心裏ゐゝ養ゐゐゐ。幼稚けまゞ何怜千代松恩と感じ。ゐ例て。
いと大切ゐゞ仕えけ。養ゐ糸花のその指ゐ。深雪い湯女と思ひとて。會釈の悪
かゝゝ。まゐゝゐのもゐ和ゐとゐ。猶ゐまゞて欲ゞ。ゐゞ注ゞしゐ怨恨ゐゝりて。
涙ゐ出ゐを夜ゐゐまゞ。ゐゐ引ゐえ正孫い。便ゐゐさゐのと情ゐゐ。ゐ意ゐ
ゐり。心配ゐゐ。わゞゐ。ゐゐ恩ゐゐ絆ゐゐゐ。ゐ月日て送りゐり。畢竟見ゐの於
ゐ及ゐ平太郎良門ゐ。ゐゐ重太郎ゐ助の再會。第五輯ゐ未ゐ説べ。着宜宜く

終

和漢
西洋書籍賣捌處

群玉堂河内屋　岡田茂兵衛

大阪心齋橋博労町角